

1939年 インドの政治危機—スバース・チャンドラ・ボースをめぐる

内藤 雅雄

はじめに

本稿は、1939年とそれに続く数年間をインド現代史の流れが決定的に変わる時期と捉え、その重要性の内容を分析することを目標とする。1939年に、反英独立運動の最大の担い手であるインド国民会議派（Indian National Congress、以下会議派と略す）は従来にない深刻な組織的分裂の危機に直面し、しかもこの年の9月に勃発した世界大戦の波紋によってその危機は増幅された。この稿の叙述の枠外になるが、この時期の出来事が究極的には、これまたインド現代史の一大転換点である「インド・パキスタン分離独立」を結果することになると言ってもよからう。

上述のようにインドの独立運動は会議派という政党の主導のもとで全国的に展開されたが、これを組織的にまとめ、都市・農村の大衆をも糾合する上で決定的に重要な役割を果たしたのがガンディー（Mohandas Karamchand Gandhi、1869～1948）であることは周知の事実である。彼は1920年の会議派年次大会で正式に党の最高指導者として認められたが、その後何度か自ら指導部の地位を降りたり、後には初級党員（当時の1ルピーの4分の1に当たる4アンナーが党費であったので4アンナー党員とも呼ばれた）の籍を放棄しているにもかかわらず、他の指導者や一般党員から終始組織の最高指導者として扱われ続けた。彼の発言は絶対的な意味をもち、いわば独裁的な地位を与えられていた。他の国、また民主主義の確立を掲げる他の運動では考えられない不思議な位置を占めていたことになる。後にふれるように、会議派の中でガンディーに次ぐ主要な指導者であったネルー（Jawaharlal Nehru、1889～1964）はさまざまな局面で彼と異なる判断をし、しかもそれを書簡や声明の形で表明するにもかかわらず、最終的には「組織の統一」を最重要視してガンディーとの決裂を回避するよう努めた。会議派の中にパテール（Vallabhbhai Jhaverbhai Patel、1875～1950、独立インド初代副首相）やプラサード（Rajendra Prasad、1884～1963、独立インド初代大統領）らを中心とした「ガンディー派」と呼ばれる強固な保守派グループが形成されていたこともそうした状況を作り出した要因の一つであったろう。

会議派は、20世紀初頭にティラク（Bal Gangadhar Tilak、1856～1920）ら急進派とゴーカレー（Gopal Krishna Gokhale、1866～1915）ら穏健派の対立が顕著となり、結局組織が二分されるという歴史をもつ。それ以後とくに1920年のガンディーの主導権確立後は、総体的に統一のとれた運動体として機能してきたが、1939年以後に起こった事態は運動そのものの行方に関わる

重大なものであった。この事態の一方の極にはガンディーがおり、他の極にはネルーとともに会議派の若手進歩派を代表したベンガル出身のスパース・ボース (Subhas Chandra Bose, 1897～1945) が位置した。ガンディーにとって、時に見解を異にしつつも公私ともに理解し合えたネルーと違い、インド人大衆に対するガンディーの強大な影響力を無視し得ないとしながらその世界観、政治哲学への疑問を隠さないボースは、行動を共にし難い人物と映ったようである。しかし歴史はこうした2人を同じ舞台に立たせることで、危機を伴う独立運動の新たな展開を生み出すことになった。以下、この時期の危機の状況に焦点を当て、ガンディーとボース、およびこの両者の間にあって迷い苦吟するネルーの3人がそれぞれどのように対応しようとしたのかを辿ってみよう。

第1章 「1935年インド統治法体制」の成立

インドにおける反英独立運動が第1次世界大戦を機に大きく動いた点には異論はなからう。この戦争の時期を通じて、ガンディー自らも徴兵役を演じたように、戦後の自治付与という譲歩を期待した会議派はイギリスの戦争遂行に協力的であった。しかし戦後にイギリス政府がインドに施行した1919年インド統治法の内容が、行政府の機能や選挙制度の限定的改善など自治とは程遠いものであったため、インド世論は沸騰した。加えて戦中のインド防衛法に代わる民族運動対策として、ローラット法の名で知られるようになる弾圧法を布いた。これに反対するパンジャブ州アムリットサル市民の抗議は、軍の無差別発砲によって抑えられ多数の死傷者を出した。こうした戦後のイギリスのインド政策に対抗する運動を指導したのがガンディーであった。彼は弾圧に対する一般民衆の抗議に加えて、大戦の敗戦国オスマン・トルコの王が継承してきたカリフの地位(ヒラーファト)をイギリスが廃止しようとする動きに反対するインド・ムスリムの要求をも組み入れて、非暴力的抵抗運動(サティヤグラハ運動)の展開に踏み切った。しかし、全国的規模で熱狂的に展開されたこの大衆運動は、ある小村で起きた死傷者を伴う警察署焼き打ち事件のため、非暴力主義を運動の基礎に据えるガンディーにとって停止を命じられた。

1919年統治法は10年期限で施行されていたため、1927年にはその改定を準備する法定委員会(サイモン委員会)が任命された。しかしイギリスが「憲法」と称する統治法改正のための委員会からインド人が完全に排除されていたため、全国的な反サイモン委員会の抗議運動が起り、1928年にインド人自身による憲法作成を目指す全政党会議が開催され「自治領の地位」要求が提起された。一方この穏健な要求に対抗して、J.ネルーやS.C.ボースらを中心とする急進派は1929年の会議派ラーホール大会(議長:ネルー)で初めて「完全独立」という政治目標

の決議を採択させた。こうした状況の中で、最初のサティヤーグラハ運動に挫折したガンディーが再び活動を開始することとなり、1930年3月、塩の専売法を侵犯する「塩の行進」という新奇な戦術に始まる非暴力・非協力運動（第2次サティヤーグラハ運動）を展開し、大衆的反英運動は未曾有の高まりを見せた。同時にこのころ農民の地税不払い運動や都市労働者のストライキなどが激化していった。この全インド的な騒然たる動きに危機感を懐いたイギリス政府は、インド内のさまざまな政治勢力の代表をロンドンに招集して円卓会議を開くが、選挙のあり方などに関してそれぞれに異なる政治要求が錯綜して会議は決裂した。会議派を代表してガンディーもロンドンに赴いたが、多くの参加者の1人にしか過ぎず、彼の発言はほとんど影響力をもたなかった。最終的にはイギリス政府の裁断で、1935年8月に新統治法（1935年インド統治法）が制定された。主たる柱は州自治の導入と、インドの領土の約4分の1をしめた584にもおよぶ半封建的で半独立的な藩王国⁽¹⁾と直接イギリス支配の下にある英領インドを併せて連邦とする体制の成立の2目標であった。新統治法により、選挙で過半数議席を獲得した政党による州内閣の樹立、従って初めてインド人による政党の州行政参加が認められたことになる。

同統治法の内容についてはすでに1934年に「白書」の形で提起されており、会議派はこれに対して同年12月にボンベイ（ムンバイ）で開かれた大会で反対の姿勢を表明した。その議長演説においてプラサードは、「軍隊、財政、外交および国内の行政に対する管理・統制を意味するインドの独立を宣言した会議派の要求」をいかなる形でも実現するのではなく、イギリスの政策に関して「世論はほとんど一致して極めて失望しかつ不満足である」⁽²⁾と述べた。1935年統治法成立後の1936年4月の会議派ラクナウ大会は、2度目の議長に選出されたネルーが、ヨーロッパとアジアに広がる帝国主義的侵略を糾弾するとともに、明確な言葉で「世界およびインドの諸問題を解決する唯一の鍵は社会主義にあると私は確信する」と呼びかけたことで知られる。演説はこのあと新統治法にふれ、それが「帝国主義的支配の束縛を強化する新たな奴隷の憲章」であると位置づけ、これに対する「われわれの姿勢は妥協のない憎悪と、それ（新統治法）を死に至らしめる不断の努力でしかあり得ない」ことを強調した。ただ、議長を頭とする会議派の指導機関である運営委員会（Congress Working Committee=CWC）の立場については、「われわれすべてが同法を拒絶し、反抗すべきである」という点では合意するものの、「それを実行する手段」では合意し得ていないとし、CWC内に見解の相違があることを隠していない。その上でネルーは、会議派としては将来的には成人普通選挙を経る制憲議会での憲法制定という道を目指す、「現在の諸状況の下では、新しい州立法議会への選挙を戦う以外の選択はない」という譲歩を示す。しかし選挙後については、（イギリス政府=インド政庁のさまざまな圧力が予想される）州内閣への参加（Office Acceptance）は「民族の名誉と自尊心」にかけて受け入れられないと明言した。周囲の発言の中には、各々の州で州内閣に参加するかどうかは会議派州

委員会の権限に委ねるべきだとの議論もあるが、ネルーはこれを「驚くべき致命的な示唆」であるとして否定した。⁽³⁾ しかし社会主義を公然と掲げたネルーの姿勢は党内右派勢力の強い反発を招き、ラクナウー大会の2か月後にパテールやプラサードを初めとする運営委員会の半数を超える7人のメンバーが辞任を表明した。⁽⁴⁾ 会議派の危機を回避したいガンディーの仲介で彼らは辞表を撤回したが、党内の右派・左派の対立は深刻さを増していった。

こうした中で、1937年1～2月に全国的に（藩王国を除く）州議会選挙が実施された。1935年統治法は、選挙人・被選挙人の資格を納税額、土地所有、学歴あるいは官公務・軍歴などによって細かく規定していたので⁽⁵⁾、この時に選挙権を付与されたのは英領インド総人口の約12%にしか過ぎなかった。しかし会議派ほか諸政党が広く非有権者をも巻き込んで運動を行ったので、選挙戦自体は極めて大衆的な様相を呈した。選挙結果は会議派が11州の総議席中45%を獲得し、かつ6州で過半数議席を占めたのに対し、ムスリム連盟はムスリム指定議席（492議席）の22%を得たのみで、ムスリム人口が過半数以上のベンガルやパンジャブ州でも敗北した。

[1937年州議会選挙結果]

| 州名 | 議席総数 | 会議派（対全議席比率） | ムスリム連盟 |
|----------|------|-------------|--------|
| マドラス | 215 | 159（74%） | 10 |
| ビハール | 152 | 95（62.5%） | 0 |
| ベンガル | 250 | 54（21.6%） | 40 |
| 中央州・ベラール | 112 | 71（63.4%） | 0 |
| ボンベイ | 175 | 88（50.3%） | 20 |
| 連合州 | 228 | 133（58.3%） | 27 |
| パンジャーブ | 175 | 18（10.5%） | 2 |
| 北西辺境州 | 50 | 19（38%） | 0 |
| シンド | 60 | 8（13.3%） | 0 |
| アッサム | 108 | 35（32.4%） | 9 |
| オリッサ | 60 | 36（60%） | 0 |
| 総計 | 1585 | 716（45.2%） | 108 |

(N.N. Mitra ed., *The Indian Annual Resister*, 1937, No. 1, 1937, Calcutta, p.42)

なお、統治法が目指した目標のうち2つ目の連邦制については、会議派全体に藩王国の存在に対する強固な反対があつて、最終的に実現を見ることはなかった。

選挙が終わると待っていたのが、会議派として州政権を担当するかどうかという問題であつた。統治法体制への協力に対するネルーや会議派内で一定の発言力をもっていた会議派社会党

(1934年結成)など左派勢力の強い拒否姿勢があり、また1935年統治法がその第93項でインド総督任命の州知事に、何等かの事態によって州行政の遂行が不可能であると判断した場合に州政府を解散させ、次の選挙まで知事自身が行政権を掌握できる特別の権限を与えていることが会議派内に論議を喚んだ。しかし選挙での好結果は州政権受諾への願望を抗しがたいものとし、1937年3月の会議派の「議会」に相当する全国委員会(AICC)において、「州知事はその特別権限を行使しないことを州会議派指導部が公然と表明し得る」との条件付きで組閣を受け入れる決議案が左派の拒否修正案を破って採択された。⁽⁶⁾ その背景にはガンディーの強い後押しがあったことも知られている。そのことは、ガンディーや会議派右派勢力を財政的に支援してきたインド財界の重鎮ビルラー(Ghanshyam Dass Birla, 1894-1983)が総督の私設秘書に出した書簡が伝えている。

貴方がご覧になったように、ガンディーの手法が最終的に会議派運営委員会に受け入れられましたし、また全国委員会によっても受け入れられることは疑いありません。……これは会議派右派の偉大な勝利であると私は考えます。⁽⁷⁾

その結果、会議派は先ず過半数議席を得た6州で、次いでガンディー派のガッファル・ハーン兄弟がムスリム住民に強い影響力をもつ北西辺境州(現パキスタンのカイバル=パクトウンクワ州)で単独政権を樹立し、無所属議員の多いアッサム州でも連立政権を成立させた。ただ、連合州では選挙前に会議派と連盟の州組織間で選挙協定が結ばれ、選挙後の連立政権に関する論議も行われていた。また連盟の最高指導者ジンナーの地盤であるボンベイ州でも複数閣僚の席を連盟に渡す連立政権が問題とされた。それにもかかわらず、それぞれ過半数議席を得た会議派は単独政権に踏み切った。選挙戦中においてもネルーは「インドにおける政治勢力はイギリスと会議派のみである」として、連盟の存在を無視する発言をしていた。会議派が選挙後に連盟の入閣を認める前提として提示したのは、連盟州組織の解散と会議派への合流という過酷な条件であり、連盟の歩み寄りを事実上拒絶するものであった。このような一連の事態はジンナーら連盟指導部に失望と不信感をもたらし、両党間の亀裂は深刻化していく。そのみならず、分離独立期にインド人官僚として重要な役割を果たしたV.P. メノンがその古典的な著書『インドにおける権力移譲』の中でふれているように、「(これらの動きが)中立的だったインド・ムスリムの世論をジンナー支持へと追いやった」という事態さえ生じた。このあと会議派との協調路線を放棄した連盟は、連盟こそが全インド・ムスリムを代弁する唯一の組織だとする強硬な姿勢を明確にし、同時に会議派州政府の下でムスリムを迫害する「ヒンドゥー支配」が行われているという宣伝によって、ムスリム大衆の連盟への組織化を進めていった。⁽⁸⁾

1935年インド統治法という体制の下で成立した州政権は、中央権力であるインド政庁の存在によって大きく制限されてはいたが、州に裁量が認められた農業・工業の開発、教育など社会

政策の分野で一定の改革に着手でき、何より会議派をはじめとしてインド人政治家たちがこれを契機に行政能力を習練し得たことの意味は小さくない。

第2章 会議派運動の新たな展開とスパス・ボースの登場

1936年には会議派大会が2度行われ、いずれもネルーが議長を務めたが、その議長演説でネルーが人々の注意を強く喚起していた国際関係は、続く1937年、38年といっそう緊迫した。スペイン人民戦線政府の危機、「盧溝橋事件」と日中戦争の開始、日独伊防共協定の締結（三国同盟は1940年）、ドイツによるオーストリア侵攻やズデーテンの割譲など、大規模な戦争が近いことを世界の人々に感じさせた。

こうした時期にネルーを引き継いで会議派議長に選出されたのがスパス・ボースである。実はボースはこれに先立つ長い期間、ヨーロッパで過ごすことを余儀なくされていた。彼は1920年代には主として出身地ベンガルでさまざまな政治活動に加わり、逮捕・投獄を経験していたが、1924年に初めてカルカッタ市議会議員となった。1927年11月にはベンガル州会議派委員会（BPCC）議長に選出され、その後海外にある時を除くほとんどの時期、彼はこの座を占めることになる。1930年には市長に選出されるが、同年3月にガンディーの指導で開始された第2次サティヤグラハ運動に参加して逮捕された。一旦釈放されたあと、1932年初めに再び逮捕されるが、獄中で健康状態が悪化したため、釈放と転地保養の必要という医師の診断によって、翌年2月にヨーロッパに向かった。イギリスからすれば体のいい国外追放、ボースにとっては強制的な亡命であったが、すべての費用は自弁であった。オーストリアのウィーンに入り、チェコ、ポーランドを経て1933年7月にはベルリンに到着した。彼はベルリンでは出来ればこの年首相となったヒトラーに会見することを望んでいたが、それは当時多くのインド民族主義者にとって気がかりであったヒトラーの著作『わが闘争』（1923年）にあるインド人への言及、つまりインド人は墮落したアーリヤ文明の後裔であるとした表現を改めてもらいたいとの願望をもっていただろう。会見は実現しなかったが、当時ヒトラーはイギリスを刺激するのを回避する方針をもっていただため、反英運動の若手指導者が彼に会うことは不可能であったろう。⁹⁾ただこの時期ボースは何度かイタリアを訪れ、ムソリーニとは会見を果たしている。

ヨーロッパ滞在中のボースは、病氣療養中の妻カマラーの看病のためドイツやスイスにいたネルーとしばしば書簡の交換を行っていた。それは病床のカマラーへの気遣い、彼女の死（1936年3月）に際しての慰めと励まし、滞欧中に次期会議派議長（ラクナウ大会）に選出されたネルーに対する政策上の助言—会議派による州政権組閣の阻止、運営委員会の拡大、会議派外

交部の設置など一と多岐に亘っていた。恐らくこの2、3年間はボースとネルーが最も緊密な交流をもった時期であったと言えよう。⁽¹⁰⁾ 妻の死を見届けたあとネルーはインドに戻るが、その帰途、ローマ空港にトランジットで降りる機会にムソリーニがインタビューを申し入れてきたのをどうにか断っている。⁽¹¹⁾ ネルーと意見を交換したボースは、早々にインドでの活動を再開することを望むようになり、新聞などにその意向を語った。無論イギリス政府=インド政庁の帰国許可が出る見込みはなかったから、再び身柄を拘束されるのを覚悟の上であった。3月13日付でオーストリアからネルーに宛てた書簡にはその心情が強く表れている。ウィーンのエギリス領事館から、(ボースが)帰国を計画しているようだが、「インド政庁としては、そうした場合貴方が自由であると期待できないことを明確にしておきたい」との速達が届いたと前置きして、それでもなお帰国したい旨をネルーに伝え、その助言を求めている。

私が会議派ラクナウ大会(4月12日開会)に間に合うように帰国すると決意した時、もちろん到着した時点で投獄される可能性があるのは分かっていました。…現状では帰国は刑務所への道を意味しています。もちろん投獄もまた公的有効性があり、このような権力の命令に挑戦し、進んで入獄を求めることに賛同する議論も多々なされるべきでしょう。……この問題で貴方を煩わせる唯一の理由は、私にはより大きな信頼を置ける人が他に思いつかないことです。⁽¹²⁾

3月26日に帰国したネルーは苦悩した後、ボースに帰国延期を促す返事を出す⁽¹³⁾、ガンディーら同僚と相談してその考えを変え、翌日「貴君の即時帰還が望ましい」と電報を打電している。⁽¹⁴⁾

結局ボースはイギリス側の許可を得ないまま、この年の3月27日に船でイタリアを発ち、4月8日にボンベイ(ムンバイ)に到着した。直ちに逮捕され、いくつかの留置所や刑務所に送られた後、カルカッタ(コルカタ)の兄サラト(Sarat Chandra Bose, 1889-1950)宅に無期限の禁足令で軟禁された。こうしたインド政庁の措置に対して、会議派として強い抗議がなされ、また民衆による激しい反対デモが展開されたが、ボース自身の健康状態が悪化し、州議会選挙が行われた後の1937年3月17日ようやく禁足令を解かれた。州議会選挙の結果と、それに続く会議派の州政権受諾については前章で述べたが、とくに後者に関して強い反対を表明していたボースも長い海外生活と国内での軟禁状態によってこの問題にほとんど関われないままに事態は進んでいた。釈放後も高血圧などで体調を崩したボースは、1937年11月に再び療養のためヨーロッパに向かった。前回の亡命中と異なり今回はイギリスをも訪問し、元インド総督ハリファックスやインド担当副大臣らとも自由に会見した。

中でも興味あるのは1938年1月24日にもたれたイギリス共産党創始者の一人パーム・ダット(Rajini Palme Dutt, 1896~1974)との会見である。⁽¹⁵⁾ ダットが、会議派による州政権受諾を

新インド統治法の成功であるという声明をイギリス政府が出しているが、これをどう考えるかと尋ねると、州政権受諾の問題と中央で連邦制を受け入れるのとは全く次元が異なり、それに州レベルで何か実質的な成果をあげられれば独立運動における人々の政治組織力を強化することになるとボース答えている。また会議派州政府の成立以降、各地で農民間の不穏や労働者のストライキが盛んになっているが、それは大衆の意識のさらなる成長であると評価する。最後の質問でダットは、ボースがウィーン滞在中に書き終えた著書『インドの闘争』（1935年初版）でファシズムについて言及しているが、これについてはどういう見解かと訊いた。これはネルーが1933年12月の新聞声明で、「現在の世界は共産主義の何等かの形態とファシズムの何等かの形態のいずれかを選択しなければならない。…その間に中間的な道はない。誰もが2つのうちの1つを選ばねばならないし、自分は共産的理想を選ぶ」と述べたのに対するボースの反論に関するものである。彼はネルーの考えが根本的に誤りであり、自分は「世界歴史の次の様相はファシズムと共産主義の統合であると考えたい」と同書で書いた。彼はこれをもう少し説明して、

共産主義とファシズムとは互いにアンチテーゼをなすものであるが、両者は多くの共通点をもっている。両者とも、個人に対する国家の優越を信じている。両者とも議会主義的民主主義を排除する。両者とも党則を重んじる。両者とも国家の計画的工業再編を主張する。これら共通の特性は新しい統合の根本を形成するであろう。この統合を自分は「サーミヤワード（Samyaward）」と呼ぶ。インドの言葉で「統合または均等」の意である。この統合を実現するのがインドの使命である⁽¹⁶⁾

と続けている。先のダットの問いに対するボースの答えは、同書を執筆してから自分の政治的考えは進んだとしながら、執筆当時は「ファシズムは帝国主義的冒険に未だ乗りだしておらず、それは私には民族主義の攻撃的形態にしか思えなかった」というものであった。著書が執筆・出版された1934-35年までには、すでにヨーロッパでは各国で反ファシズムの動きが顕著で、日本の中国侵略は国際世論の批判的となっていたことを考慮すれば、反イギリス帝国主義の意識は強烈であったにしても、ファシズムには甘さがあったと見るべきであろう。この点に関して、独立後のインドで多くの著述を著して有名となり、1970年にインドを離れてイギリスに定住したニラード・チャウドゥリ（Nirad Chandra Chaudhuri, 1897～1999）の興味深い観察を紹介しておこう。彼は1937-38年にスバースの兄サラトの私設秘書を務め、彼に代わって会議派指導者への書簡を代筆したりし、この間スバースとも近くで接した経験をもつ。彼はその晩年の半自伝的な著書でボース兄弟の周辺、彼らとガンディーとの関連などを詳しく叙述しているが、その中でとくにベンガルの知識人を念頭に置きながら、「忘れてはならないのは、1930年代にはインドのインテリゲンチヤは何ら矛盾を感じないで、親ソヴィエトであるとともに親ナ

チあるいは親ファシストであった」⁽¹⁷⁾と書いている。

ボースは病気療養のためのヨーロッパ滞在を終えて1938年1月下旬にカルカッタに帰着したが、その留守中にこの年予定されていた会議派ハリプラー大会の議長に選出されていた。彼がロンドンからカラーチーに着いた1月23日付の電報で、ガンディーは「お帰り。神が君にジャワーハルラール（ネルー）の後継者の重責を担う力を与えられんことを」⁽¹⁸⁾と祝福している。ただこの選出についてガンディーには迷いもあったようで、人選の過程で彼の腹心とも言うべきパテルに宛てた1937年11月1日付の覚書で次のように述べていた。「私はスバース（ボース）は全く信頼すべき人物でない（not at all dependable）と思に至った。しかし今（次期会議派の）議長になるべき人物は彼を措いていない」⁽¹⁹⁾と。このあとの両者の対立の伏線がこの辺りにもすでに見られたというべきか。会議派の中で、とくに右派と目されるグループにはボースの議長就任には強い反対があった。例えば、マドラス（現タミルナードゥ）州知事がインド総督に宛てた書簡（1938年1月19日付）によれば、同州首相で指導的なガンディー主義者として知られるラージャージー（Chakravarti Rajagopalacharya, 1878～1972）との会話で、会議派運営委員会（CWC）の多数が右派なのにボースのような極端な左派の議長を選出したのは異常だと語ったのに対し、後者は自分としてはそれを阻止する最善の努力をしたのだが遅きに失したと述べた後、次のように付け加えたという。「CWC内の多数派である右派はボースの活動を制御し、彼らの望む方向へ彼を導くことが出来るであろう」⁽²⁰⁾と。ラージャージーのこの予測は現実のものとなってしまう。

2月に開催されたハリプラー大会でのボースの議長演説は代々の議長演説の中で最も長いものとされる。⁽²¹⁾この演説で彼は先ず、改めて国内での非暴力主義的な大衆運動と、国際的な宣伝によってイギリスに圧力をかけることの重要性を訴えた。組織的運動との関連で言えば、会議派が労働戦線と農民戦線においてより重要な役割を果たすことの必要性を指摘した。また、1935年統治法の柱の1つである、封建的性格の強い藩王国を残す形になる連邦制への反対が強調されている。同法が防衛や外交政策に対する権限、および支出の主要な部分がインド人の管理外にあることにも厳しい批判が加えられた。ボースは、会議派の右派グループの間に、連邦制に関してイギリスと妥協しようという動きがあるとする強い疑いの念を語っており、これが今後パテルらの反感を招くことになる。会議派の組織的な運動によって独立を達成したのちの段階として、ボースは社会主義的路線に沿った発展の道を提示する。経済的側面については、農業の発展のみならず「国家が所有し国家が統制する工業発展の包括的計画」が不可欠であるとし、同年10月に発足することになるソ連をモデルとした国家計画委員会の設立を示唆している。その他重要なのは、インド内の統一という観点から、インド諸言語が使用するさまざま異なる文字をローマ字に統一するという提案を行った点であろう。これは彼が1934年にトルコ

を訪れて実感したことであると述べているが、直ちに採用するのは無理でも将来の選択肢として考慮してほしいと訴えている。⁽²²⁾ この大会では現下の国際問題も広く取り上げられ、日本の中国侵略への批判、日本商品ボイコットの呼びかけ、ヨーロッパにおけるファシストの侵略への批判などが議論に上った。中国への共感はこの年から開始された対中国医療使節団の派遣として実現する。大会は、インドは予想されるいかなる帝国主義的戦争にも関与せず、その人的・物的資源がイギリス帝国主義の利害のために利用されることを認めないとの決議を採択した。ただ同決議には、ネルーやその他の左派勢力が求めたような徹底したファシズム非難は含まれていなかった。しかしボースの場合、インドの民族運動のために「イギリスの敵」の助けを活用するという点で他の左派指導者と異なっていた。これは世界の歴史の上にはしばしば登場した「敵の困難は味方の好機」という発想であるが、敵とさえ常に交渉の場を維持しようとするガンディーからすれば排除すべきものであった。ボースは、ドイツやイタリアにおける人権侵害に気付かなかったわけではないが、ヒトラーやムソリーニがもしイギリス支配を打倒する手助けとなるならそうした抑圧は無視することも厭わないという立場であった。⁽²³⁾

このころ全体としての会議派はガンディー派、つまり右派勢力が圧倒的に強く、運営委員会もボース自身の他には左派と言えるのはネルーだけであった。議長としてのボースは、先に見た計画委員会の立ち上げや対中国医療使節団派遣の実現などに貢献したものの、組織内ではほとんど孤立していた。しかし議長就任の当初はボースもガンディー派との提携を心がけていたようで、ガンディーと衝突して 1938 年 7 月に中央州の州首相の座を失ったカレー (Narayan Bhaskar Khare, 1884~1970) がその『自伝』の中でボースについて、「議長 (ボース) は会議派の 4 アンナー党员でもないマハートマー・ガンディーの手の中の操り人形である」とまで書いている。⁽²⁴⁾ しかし当時ボースの近くにいた前述のチャウドゥリの観察によれば、「1938 年半ばからガンディーは会議派運営に関するボースの能力を評価しなくなり始めており、彼の親密な協力者も彼への不満を表明していた」⁽²⁵⁾ という。右派の領袖の 1 人パテールは親しいプラサードへの書簡で、「(病氣療養中のプラサードや海外滞在中のネルーが留守の現在、) われわれは自分の仕事のこと知らない議長 (ボース) の面倒を見なければならぬ」⁽²⁶⁾ などと酷評している。このころのガンディーの文章に会議派内の規律について言及したものがある。彼が組織の主導権を握った 1920 年のころにふれて、これを「1 つの意志、1 つの政策、1 つの目標と厳しい規律をもって行動する 1 つの軍隊」と形容している。これに比べると、30 年代末の現時点での会議派はかつてのような「同質的な (homogeneous)」組織ではなくなってしまったというのが文章の論点である。彼が「同質的」と言う時、それは「真理と非暴力」の信条、カーディー (手織綿布の生産と着用)、ヒンドゥー・ムスリム統合、不可蝕差別廃止、禁酒などを内容とする「建設的綱領 (constructive programme)」への強固な信念で結ばれた組織を意味した。そうし

た信念を持たない党员や党派が会議派に入り込んでいる現状を改めねば、混沌は避けられないという強い決意が文章から読み取れる。⁽²⁷⁾ ボースは、1938 年後半から自分の出身州であるベンガルにおける連合党とムスリム連盟の連立政権に対して、これを打倒して会議派が加わる新たな連立政権を樹立したいとの立場を明らかにしていた。彼が最も言いたかったのは、現在自分たちが参加していない 3 つの州（ベンガル、パンジャブ、シンド）の政権に会議派を含む連立政権が出来れば、会議派としては公式に英領インド全体の民意を代表してイギリス政府に対応する立場に立てるということである。ガンディーもこれに関して当初は是認する姿勢を示していたようであるが、12 月にはアーザード、ビルラーなどと諮った結果一とボースは考えた一、態度を変えてそうした形の連立政権への参加に反対を表明した。⁽²⁸⁾ ボースにはこれは重大な裏切りと映り、ガンディーに宛てた返事で怒りをぶつけている。その返事の最後の部分である。

もし貴方の手紙にあるように未だその決心に固執されるのであれば、早い時点で私を現在の重責から解き放って下さるようお願いいたします。何故なら私としては、自分自身が国の利益にとって有害であると誠実に信ずるような政策に与することは出来ないからです。⁽²⁹⁾ これは正にガンディーへの挑戦と言っても過言ではあるまい。

第 3 章 トリプリ大会と会議派の危機

1938 年 10 月ころになると、次期会議派トリプリ大会の議長の選出問題が表面に出てくる。1929 年 12 月に改定された会議派党規（Constitution）によれば、先ずいくつかの会議派州委員会（several PCCs）が次期会議派大会開催州に設置された接待委員会（Reception Committee）に対し同大会の議長に適任と見なす人物の名を提示し、接待委員会は提出された人物名を全ての PCC に配布する。全ての PCC が招集された特別会合においてその過半数によって推薦された人物が次期議長となる。⁽³⁰⁾ しかし 1920 年にガンディーが会議派の主導権を任されて以来、彼が推薦した人物が全会一致で議長に選出されるのがほとんど通常の慣例となっていた。⁽³¹⁾ 1936 年、37 年と続いて議長を務めたネルーの場合も例外ではない。

1938 年の場合、会議派指導部間で意見の交換が見られる早い例がアーザード（Abul Kalam Azad, 1888～1958）から 10 月 28 日にパテール宛てに送られた書簡である。当時すでにボースが 2 年連続での議長就任の意志があることが伝えられており、これに対しガンディーの周辺では党内の有力なムスリム指導者であるアーザードを推す声が強かった。この書簡でアーザードは、

著名な知識人たちが私を訪れてきて、私の立候補拒否はとても残念で、そのためパテールが次期議長になるのではと「恐れており」、彼らはボースが再選されるべきだとするその党派

の提案を受け入れるざるを得なくなっていると言います。私はその情報は全く無根拠で、議長選挙の件は未だ議論に上っておらず、私を受け入れるか拒否するか何も言っていないと述べると彼らは大変驚きました。続けて彼らは、運営委員会ではすでにこの問題が出されて、サルダール・パテルの名前が提示される恐れもあり、「彼（パテル）は反社会主義者、反急進主義者と考えられ、連邦制にも強い反対意見を持たず、ヒンドゥー・ムスリム統合にも反対だと見なされているので、会議派をこうした危険から救出するためにスバース・バーブー（ボース）の名を挙げる必要があった」と言っていました。そのために必要なことは何でもやると言うのですが、私は軽率な行動に出ないように彼らを止めました⁽³²⁾

と書いている。この時期には次期会議派議長選挙に関して、従来と異なり複数候補者間の厳しい選挙戦が予想されたため人々の大きな関心の的になっており、また将来の政治に関心を持つ人々の間に強硬な右派指導者と見られるパテルの存在への懸念が窺える。議長候補者としていくつかの州委員会の推薦によってボース、アーザード、パテル、シーターラーマイヤーの4人の名が挙げられた。このうちアーザードはガンディーらに推され、一旦はそれを受け入れながら結局立候補を辞退した。パテルもすでに辞退していた。シーターラーマイヤー（Pattabhi Sitaramayya, 1880～1959）は南インド・アーンドラの古手の会議派指導者であったが、ボースに比べれば知名度が低かった。それでもガンディーとしては彼以外に選択肢がなく、12月21日に彼がネルーとパテルにそれぞれ送った書簡は短い、そこに大きな苦渋が読み取れる。

マウラーナー（アーザード）が断固として拒絶してきました。従ってこれ以上彼に押しつけるのは妥当だとは思えません。パッタービ（シーターラーマイヤー）を考えるのが最良かと思います。⁽³³⁾

一方、ボースはベンガルを基盤として進歩的な青年層を中心に全国的な名声を享受していた。例えばベンガル出身の著名な詩人タゴール（Rabindranath Tagore, 1861～1941）はボースを「国の指導者（Deshanayaka）」と呼び、政治的に後退を続けてきたベンガルの興隆が彼の肩にかかっていると常々語っており、自ら率先してボースを招いた励ます会を開いている。会議派議長への再立候補に当たって、「自分は政治の舞台から離れている人間」であるとしながらも、選挙には強い関心を示していた。⁽³⁴⁾

ボースは1939年1月21日に、「最初の声明」と呼ばれるようになる声明を発表して選挙への姿勢を明らかにした。従来と様相が異なる議長選挙であることに読む人々の注意を喚起しつつ、次のように述べている。

このような状況下では、選挙戦は望ましからざるものではないかも知れない。いや増す国際的緊張と、予想される連邦制をめぐる戦いを考慮すれば、新しい年は我ら民族の歴史上重大な年となるだろう。しかしもし、マウラーナーのような傑出した指導者たちによる訴えの

結果、大多数の代議員が私の再選に反対票を投じるなら、私は忠実にその決定に従い、普通の兵士として会議派と国に奉仕し続けるだろう。⁽³⁵⁾

しかしこれに対して、ガンディーが強い影響力をもつ党内右派グループにはボースの2期連続の再立候補に反発が強く、ボースの運営委員会メンバーの半数を超える7人—パテル、プラサード、J. ダウラトラム、J.B. クリパラニ、J. バジャージ、S. デーオ、B. デサーイー—が、1月24日付で連名の声明を発表した。声明は従来の全会一致の議長選出に例外が出来るのを遺憾とし、会議派議長の地位は国の統一の象徴ではあるが単なる「議長 (chairman)」といういわば名誉職で、出来るだけ多くのすぐれた人物にこの地位を委ねるのが妥当であると説いた。しかも極めて「例外的な状況下以外は」同一人物を再選しないという「規則」に従って、ボースには立候補を再考してほしいと要望している。⁽³⁶⁾ ボースは翌日反論の声明を発表する。シーターラーマイヤー推薦の件は運営委員会で論議されたこともなく、それは公正ではない、また「例外的な状況下以外は」議長の再選はないとする規則があるというのも領けない、それに35年統治法が狙う連邦制と真に戦うためには左派の議長が必要であるとするのがその趣旨であった。⁽³⁷⁾ この後選挙投票日である1月29日の前日まで、シーターラーマイヤー、パテル、そして彼らとは多少立場を異にするがネルーらが次々と声明を出し、これにボースが答えるという論戦が続くことになる。このうちパテルは、連邦制への反対は会議派全体の一致した姿勢であり、それは左派・右派といった議論とは無関係であるとしてボースの再選は意味がないと断定した。⁽³⁸⁾ ネルーもボースの立候補に反対であったことを明らかにするとともに、従来の議長選挙が会議派の政策・綱領に関する相違を争点にしたことはなく、ボースが問題とする連邦制についても党内には何らの対立もないはずだと反論している。選挙そのものは二義的なものだとしながらも、会議派の政策を実行する上では議長によって違いが出るものであり、その地位は名誉職的な単なる会議の「議長 (speaker)」ではないとして、先のパテルの議論を否定した。⁽³⁹⁾ 投票日前日にボースは謙虚さとある種の自信をこめて、自分の立候補の意義を改めて訴えた。少し長いがその部分を以下に引用しよう。

…議長選挙の立候補者として私の名がいくつかの州から提出された時、私はそのことを知らなかった。良くも悪くも会議派の相当部分の人が私の2期目の議長就任を求めている。しかし運営委員会内の何人かの重要な委員はそれを認めていないようだ。…彼らは私が彼らの道具でないから反対するのだろうか。再選は例外的なことであると言われる。しかし会議派の規約には再選を妨げる項目はない。過去に何人かの議長が2期以上を務めてきた。来るべき1年は例外的で重大な年となることが予想されるので、私の再選を求める声が出ている。

サルダール・パテルの(兄サラトへの)電報には、私の再選は国の利害にとって有害だと書いてあるが、これは驚くべきことだ。確かにこの数年は複数の候補者が立つことはなかつ

だが、今回の選挙戦は劇的なものとなるだろう。もし運営委員会内の1グループによる指名でなく代議員による正しい選挙を実施するとなれば、代議員は自由で拘束されない選択をなすべきである。…

民主主義の問題の他に、今回の選挙には別の重要な問題が含まれている。もしわれわれがインドの独立達成のため、会議派内の統一と団結を維持し、また右派と左派が提携して行動するとなれば、会議派議長はその両派の信頼を獲得しなければならない。パンディット・ネルーはこの役割を見事な形で果たした。そしておそらく私は、彼よりずっと劣る程度ではあるが役割を果たしたと、控えめながら主張できようか。⁽⁴⁰⁾

予定通り1月29日に招集された会議派全国委員会(AICC)の場で、議長選挙の投票が行われた。約3300人の委員一欠席、棄権も多少あった一による投票の結果、大方の予想に反して、ボースが1580票、シーターラーマイヤーが1377票となり、ボースの再選が確定した。しかしこの時点での決着は、次の長い政治劇の幕開けに過ぎなかった。

選挙結果が判明した翌々日にガンディーは新聞声明を発表し、その中で「この敗北は彼(シーターラーマイヤー)のである以上に私のものである」という一文を挿んで読む人々を驚かせた。声明の他の個所で彼は、党員資格を偽る多数の例が報告されるなど党組織の腐敗が急速に進んでいるという、彼の新聞『ハリジャン』で繰り返し述べてきたことを強調しているが、今回の議長選挙にそうした偽党員の増加が関わっていたのではないかとの疑惑を彼はもっていたようである。声明の終わりの部分で、「結局のところ、スパーズ・パーブーは国の敵ではなく、国のために苦難を積んできた。彼自身の考えでは、その政策や綱領が最も先進的で大胆なものだというのだから、少数派一選挙で敗れた自派を指している一としてはその成功を祈るのみで、もし歩調を合わせられなければ会議派を抜けるべきである」とまで述べているが、これは今後起こるガンディー派の離脱を予言しているとも感じられる。⁽⁴¹⁾

これに対する反応は総じて、選挙結果がガンディー自身の立場への不承認ではないという点で一致しているようで、ある新聞は運営委員会内の右派委員一おそらくパテールを中心としたグループであろうと思われる一の発言や行動に対する反発が背景にあったと指摘している。⁽⁴²⁾ボースも声明を出し、ガンディーが「自分の敗北」と述べたことは遺憾であるとし、投票者が決してガンディーへの賛成・反対を表明したのではないことを強調した。ガンディーが声明の中で、「結局のところ、スパーズは国の敵ではなく」という表現を用いたことに苦々しさを感じながらそのことにはふれず、自分はしばしばガンディーの公的見解と異なると感ずるとした上で、

マハートマージーが私をどう思っているか知らないが、それがどういう考えであるかにかかわらず、彼の信頼を得るよう努めるというのが常に私の目標である。理由はただ一つ、も

し他の人々の信頼を得られたとしても、インドの最も偉大なる人物の信頼を得ることが出来ないなら、それは私には悲劇だからである⁽⁴³⁾

と結んでいる。選挙を通じて会議派党員多数の信任を得られたという自信はあったものの、ガンディーがインド人の間でもつ特別な意味を考えれば、ボースとしてもこうした発言をせざるを得なかったのであろう。彼としては自分のもとで会議派を機能させるためには、どうしてもガンディーと彼の指導権を受け入れる党派の人たちの支持が必要であり、新たな運営委員会も会議派社会党系の活動家は除外して、ネルー以外はほとんど右派の委員で固めた。それにもかかわらずガンディーの姿勢は硬く、2月5日付でボースに「私が見るところ、君が右派と考える古い同僚たちが君の内閣（運営委員会）で任務を果たすことはないだろう」⁽⁴⁴⁾と書き送っている。ネルーによれば、このあと2月8日にガンディーは彼に運営委員会を辞任せよとの書簡を送っているが、この段階ではネルーは「他の委員にそうするよう助言するのは私の役ではないし、自分には辞任すべき理由が分からない」と断っている。⁽⁴⁵⁾ そうした事態が進む中で、ボースはなおもガンディーへの接近を図り、病身を押ししてワルダールのアーシュラムに赴くことを決めた。新聞も、ボースが譲歩すれば会議派が通過しつつある危機的時期は回避できるかも知れないと幾分楽観的な解説をしているが、⁽⁴⁶⁾ 結局会談は決裂に終わった。

その結果として、2月22日にパテル、プラサードをはじめとする12人の運営委員会委員が議長ボースに辞任を申し出た。辞任を申し出た委員の名を挙げれば、アーザード、ナーイドゥ夫人、パテル、プラサード、B. デサーイー、シーターラーマイヤー、S.R. デーオ、H. マハタプ、クリパラニ、アブドゥル・ガッファル・ハーン、J. バジャージ、J. ダウラトラムらで、彼らはいずれも出身州の会議派組織のいわばボスの存在であり、会議派の中核指導部とも言えるこうしたグループの影響力が如何に強力なものは想像を超えるものであった。12人連名の書簡は短いが、ボースへの最終的訣別を確実に表明している。

われわれは最近の出来事を注意深く考察し、議長選挙をめぐる貴方のいくつかの声明を読みました。貴方の不幸な病気と引き続くわれわれの会議の取消しによって、われわれの見解を示すことが出来ませんでした。

現段階では、われわれ署名者は運営委員会の委員を辞任することを申し入れるのがわれわれの義務と感ずるとだけ申し上げれば十分でしょう。われわれは貴方が自分の見解を代弁する内閣を選ばれることを望みます。

われわれはインドが、会議派内の相対立する異なるグループ間の妥協に基づかない明確な政策をもつべき時が来たと感じます。

それ故、多数派の見解を代弁する同質的内閣を選ぶことが正しいでしょう。貴方が提示する政策でわれわれが歩調をともに出来ると考えるところでは可能な限り協力することを信じ

て下さい。⁽⁴⁷⁾

ガンディー自身の言葉をそのまま綴った文章と言ってもよい内容である。同じ日にネルーは別個に声明を発表した。その中で彼は、議長選挙以来錯綜する状況が続く間、それをいっそう複雑にしないように自分は意見を述べるのを控えてきたと前置きして、運営委員会の同僚の中にイギリス側との妥協の動きがあるとするボースの発言は甚だ遺憾であるとしつつ、議長である彼が病床にあるため運営委員会の会合も開かれない状況では自分も何らかの態度を示す必要を感じずと述べて、以下のような「態度表明」を行っている。

過去において私はしばしば自分は運営委員会に属すべきでないと感じたことがある。現時点ではその思いはいっそう強い。何故なら議長選挙後の今日のような背景の中では、こうした高い地位の責任を受け入れることが出来るとは思えないからだ。私は、議長（ボース）は自由に自らの政策に従い、その政策に賛同するものから彼の同僚（運営委員）を選ぶのが正当であると主張する人たちと同意見である。⁽⁴⁸⁾

内容的に不明瞭なものであるが、実質的にこれが彼の辞任表明となった。このような会議派指導部の動きに対して一般紙の反応には厳しいものも多かった。中立的な『トリビューン』紙は先の12人に辞任のついて、ボースの回復を待って次の運営委員会を開こうとしなかったことを不満とし、彼と向き合って話し合える事柄についてはあらゆる協力をしようと明言した態度にも完全に矛盾すると強い調子で批判した。運営委員会の構成についても異論を呈し、

他の点でもわれわれの見解は、マハートマーや辞任を表明した委員のそれとははっきりと異なる。もし会議派が統一戦線であるべきなら、その政策・綱領は切り取ったような明確な形でなく、すべての主要なグループの間の最大の合意を代弁しなければならない。会議派が現時点で（前者のような）政策・綱領を採択することは、統一戦線としてのその性格を終息させてしまうからである⁽⁴⁹⁾

という尤もな議論を展開させている。左派系の『インデペンデント・インディア』紙はネルーの声明に批判的で、それが「曖昧な攻撃」以外の何ものでもなく、むしろ彼の行為の客観的結果は「左派を弱め、右派を計り知れず強化した」とまで評した。⁽⁵⁰⁾

イギリス側は事態をどのように見ていたのか、ここにインド総督リンリスゴウが、ベンガル州知事を務めた経験のあるインド担当大臣ゼットランドに宛てた書簡がある。会議派の内紛は当然ながら彼らの強い関心を引いているが、リンリスゴウはボースの立場にふれて、彼がどんなに抵抗してもマハートマーと前運営委員たちを相手にして有利に戦うことは無理だし、自ら規律を欠いた責を取らねばならないだろうと冷静な状況判断を示した。会議派の今後の行方については、「現状を見る限り、トリプリの結果がどんなものであれ、会議派内の2派間により深くより本格的な分裂が生じる材料があるように思われる」との予測を伝えている。⁽⁵¹⁾

第52回の会議派大会は1939年3月10日より12日まで、中央州の小村トリプリで開催された。⁽⁵²⁾ 大多数の運営委員が辞任していたので、運営委員会を欠いたままの大会であった。⁽⁵³⁾ 病気を押しつけて当地にやってきたボースであるが、病状が悪化して大会への出席は出来ず、用意された議長演説は兄のサラトが代読するという前代未聞の出だしであった。その演説は前年のそれが会議派史上最長であったのと対照的に記録的に短いものとなった。この短い議長演説の内容は多岐にわたらず、ほとんどが大規模な戦争の危機が迫った国際関係中でインドが進むべき運動の方向に絞られた感がある。ハリプラー大会以降の緊張した国際情勢に直面したインドが採るべき道としてボースが大会に提起したのは、「スワラージ（完全独立）」の課題を掲げ、最後通牒の形でわれわれの民族的要求をイギリス政府に突きつけることであった。それはガンディーやネルーと違ったボースの「読み」である。

…われわれはわれわれの民族的要求を最後通牒の形でイギリスに突きつけ、同時に返答が返されるべき一定の制限時間—ボースは6か月という期限を念頭に置いていた—を申し入れるべきである。もし返答がなされなければ、その要求を押し通すためにわれわれの手にある制裁手段に訴えるべきである。今日われわれがもつ制裁手段とは大衆の不服従運動すなわちサティヤーグラハ運動である。しかも、今日イギリス政府は全インド的サティヤーグラハ運動のような大きな闘争に長期間立ち向かえる立場にはない。

会議派の中に、イギリス帝国主義に大きな攻撃をかけるような時期は未だ実っていないと考えるような悲観的な人々がいることは嘆かわしい。しかし徹底して現実主義的に時局を見れば、悲観主義が立ち入る場は全くないように思える。会議派が8州で政権にあり、われわれの民族組織の力量と威信は上がった。大衆運動は全英領インドを通じて相当に前進してきた。最後だが重要なのは、藩王国内での前代未聞の政治的覚醒がある。特に国際状況がわれわれにとってこれだけ有利な時、われわれの歴史の中でスワラージへ向けての最終的前進のためにこれ以上の好期があるだろうか。⁽⁵⁴⁾

一方このころガンディーは、グジャラートの小藩王国であるラージコートにおける人権問題で藩王国政府に対する抗議の断食に入っていたため、国内に暗い雰囲気立ちこめていた。彼はこの小藩王国の問題に異常な関心を注ぎ、トリプリ大会への参加も断っていた。しかし大会にはパテールやプラサードなど先に運営委員会を辞任した人々を含め、ほとんどの主だったガンディー派の指導者は出席していた。ボースは日程のほとんどに出席できない状況で、アーザードが議長を代行した。

それまでにない混乱を伴った議長選挙のあとであるため大会では激しい発言が飛び交ったが、大会最終日に一つの大きな動きがあった。いわゆる「パント決議案」である。パント（Govind Ballabh Pant, 1887～1961）は忠実なガンディー主義者として知られる古参の会議派活動家で、

1937年以降連合州の州首相の座にあった。彼が全国委員会に提出した決議案は、過去20年間「マハートマー・ガンディーの指導下で」遂行されてきた会議派の基本的政策に忠実であるべきことを前提とし、これまでの危機的状況においてそうであったように、ガンディーのみが国を勝利に導き得るという事実に鑑み、「会議派議長はガンディーの願望に従って次年度の運営委員会を任命する」ことを要請している。⁽⁵⁵⁾ この提案に対してさまざまな賛否の議論がなされたあと、パントは提案が決して議長ボースに対する「不信任」動議でない点を強調しつつも、先の議長選挙がガンディーの政策・原則への不同意であったのだから、ボースとしてはそれまでのようにガンディーの助言・指導を求めることは出来ないと断言する。従ってガンディーの指導を求めるならこの決議案を受け入れざるを得ないだろうというのがパントの論理である。その上で、インドにおけるガンディーの位置の再確認を迫るような発言を続けた。パント曰く。どこであれ国家が発展したのは、ある人物の指導の下においてである。ドイツはヘル・ヒトラーに依存した。人々が彼の手段に同意したかどうかにかかわらず、ドイツがヘル・ヒトラーの下で発展したことは否定できない。同様に、イタリアはセニョール・ムソリーニのために興隆し、またロシアを起ち上げたのはレーニンである。自分としてはヘル・ヒトラーやセニョール・ムソリーニが行った多くのことは嫌いであるが、彼らの多くの欠点にかかわらず国民は彼らを愛し尊敬した。インドについてみれば、わが国にはマハートマー・ガンディーという利己心を全くもたない1人の人物がいる。ならば、われわれはそうした利点を十分に活用すべきではないのか、と。⁽⁵⁶⁾ 記録によれば、最後の部分では聴衆は笑い声をあげたそうであるが、これは明らかに独裁の権威を期待する声である。論議延期の動議も出されたが否決され、最終的な投票の結果、賛成218票、反対135票（出席議員378人、会議派社会党は棄権）となりパント案は全国委員会にて採択された。左派系の新聞はもちろん、ガンディーに近いとされる『アムリタ・バーザール・パトリカー』紙さえも、「会議派は今、単一の指導者、厳密な規律性と多かれ少なかれ明確に規定された綱領をもつ政党機関に変容しつつある。異なる思想や綱領をもつ新しい党派の形成はもう奨励されなくなった」⁽⁵⁷⁾と書いている。

このあと4月中旬までガンディーとボースの間で数十通の書簡と電報が交わされるが、両者の立場は平行線を辿った。特にボースが3月25日にガンディーに送った書簡は、従来の自説の主張と妥協の線を模索しようとする意図が入り交じった内容になっている。彼は「議長を操り人形のように位置づける」パント案は会議派党規（議長選挙に関する第15項）に反する超権能的（*ultra vires*）であると主張する一方、議長が選ぶ運営委員会はあくまで異なる党派・グループで構成されるべきであり、各派の代表者数については妥協の用意があると示唆する。最後にこの書簡で自分の述べていることは、「先の議長選挙、特にトリプリ大会以降に起こった出来事にもかかわらず、会議派内のすべての党派が未だ協同できるという前提に立っている」として

ガンディーの協力を求めている。⁽⁵⁸⁾ これに対するガンディーの返事は、ボースは何にも縛られず自由に運営委員会を選ぶべきであるとしながらも、基本原則の異なる党派が混在する委員会は「有害である」という主張を繰り返すのみであった。会議派内の「ガンディー派 (Gandhiites)」—この表現は誤っていると彼は指摘しているが—について、彼らは（ボースに）協力できるどころでは協力するが、彼らが多数派となれば自らを抑えることはないだろうと、右派による巻き返しの可能性を示唆している。⁽⁵⁹⁾ 3月31日付の返書で、ボースが自分に議長辞任の圧力がかかっているが、自分としてはそれに抵抗するし、もし辞任すればそれは会議派政治の新たな局面の始まりとなり「苦痛に満ちた内戦」の開始となろうと書くと、ガンディーはボースが自らの見解を委員会に提出すべきだが、もしそれが受け入れられない時は「君は辞任し、委員会にその議長を選出させるべきです」⁽⁶⁰⁾ と初めてボース自身に彼の辞任について述べている。この間、ボースとネルーの間にも多くの中にはそれぞれの著作集で10数ページに及ぶ長いものもある—書簡が交換されたが、ボースのネルーへの不信任は次第に募っていき、辞任を決める少し前に在英中の甥に宛てた書簡には、「危機にある中で、私個人にとって、そしてわれわれの大義にとって、誰よりも大きな傷を負わせたのはパンディット・ネルーだった」⁽⁶¹⁾ という表現まで使われている。

一方ネルーの立場について言えば、ガンディーとボースの間にあつて苦悩する姿が当時の彼の書簡から読み取れる。4月17日付のプラサードへの書簡では、会議派が陥っている行き詰まりに対して自分は どうしていいのかわからず、沈黙しているほかない、現在の混乱を解決できる数少ない人物として君に助けてほしいと「泣き言」に近い言葉を記している。⁽⁶²⁾ 同日ガンディーに宛てた書簡では、「スペースには多くの弱点がありますが、友好的に接触すれば動かされ易い人間なのです」とボースの気性を指摘し、ガンディーにもボースに対する同じような対応を求めた。その上で、そのため自分としてはボースに「運営委員会の構成メンバーの提案について完全に貴方に委ねる」ように助言するから、「どうか彼を会議派議長として受け入れてほしい」と懇願している。⁽⁶³⁾ ところがこれも同日付アーザードへの書簡では、「残念ながらスペース・バーブーはトリプリ大会以前と全く同じ立場です。彼がトリプリ決議に従って行動し、事態を改善してくれる望みはありません」と極めて悲観的である。⁽⁶⁴⁾ 結局ガンディーからは、運営委員会の構成についてボース自身が同じ路線を追求するメンバーで固めるべきであるという従来の主張しか引き出せなかった。ボースは前年の委員たちの同意も得られない状況で、最終的に4月29日、カルカッタでの全国委員会の席上辞任を表明した。ボースの辞任声明は極めて短いものであったが、その中で彼は「インドおよび国外でわれわれが直面している危機を考慮すれば、可能な限り大多数の党員の信頼を集め、会議派全体を代弁するような混成の内閣をもつべきである」という自らの確信を述べ、新しい議長の下で全国委員会が事態を処理すること

を願うという言葉で結んでいる。⁽⁶⁵⁾ ネルーがボースに議長辞任撤回を求める動議を提出したが、ボースはこれを拒否し辞任が決定した。ボースの辞任に当たって師タゴールから寄せられた次のメッセージは、彼にとって最大の慰めであったと推測される。

重大な状況の只中で君が示した品位と自制は、君の指導力に対する私の賞賛と信頼を勝ち取りました。その同じ礼儀正しさは、ベンガル自身の自尊心のために持続されるべきであり、それによって君の見かけ上の敗北を恒久の勝利へと転換させる手助けとならねばなりません。⁽⁶⁶⁾

大会ではこの事態を党規約で言う「非常時」と見なされ、全国委員会が議長を選出することとなりプラサードが選ばれた。直ちに任命された運営委員会にはネルーおよび会議派社会党のメンバーの名はなかった。

終章 第2次世界大戦の勃発と新たな政治危機

会議派議長を辞任したボースはカルカッタを拠点にフォーワード・ブロック (Forward Block) という政治組織を立ち上げるが、この段階では未だ会議派を離脱する意図はなかった。しかし6月にこの組織を中心に会議派社会党、インド共産党、急進的民主党などを糾合して左翼統合委員会 (Left Consolidation Committee=LCC) を発足させると、ガンディー派を中心とする会議派指導部の間に危機感が漂い始めた。

同委員会の結成と同じころガンディーの草案になる決議案が会議派全国委員会 (AICC) に提出され、採択された。同決議には、海外インド人労働者の人権擁護に関わるもの、アーンドラ州のマドラス州からの分離を求めるものなどとともに、「いかなる党员も州会議派委員会の事前の了承を得ずして、インド内の行政州 (英領インド) においていかなる形のサティヤグラハも行ってはならない」という指令が含まれていた。⁽⁶⁷⁾ 自由に大衆的運動を行うことを禁ずるこの決議に対しては一般紙も否定的な論説を載せたが、ベンガルでは特に反対の声が強く、会議派州委員会 (BPCC) はこれを遺憾とする決議を行い、かつ7月9日にLCCによる反AICC決議の大衆集会を開催することを決めた。ネルーはAICC決議には反対であるとしながらも、「党内の不一致を生み出し、隊列を弱める」として抗議集会の否定的性格を批判した。⁽⁶⁸⁾ 抗議集会はベンガルのみならずマハーラーシュトラ、中央州などの各地で開かれ、「スパーズ・バーブー、ジンダーバード (万歳)」といったシュプレヒコールが叫ばれたと新聞は報道している。⁽⁶⁹⁾ ボースのこうした行動に対する会議派中枢の対応は厳しく、8月11日の運営委員会において、それは「会議派内に完全な無秩序」を招きかねない「極悪な規律違反」であると断じた。委員会の決議はその上で、ボースにこの時点から3年間BPCC議長としての資格を剥奪するという懲戒処

分を科した。⁽⁷⁰⁾ しかもこのあとのボースと会議派議長プラサードとの数度に及ぶ電報のやりとりを見ると、結局会議派指導部はボースの BPCC 議長辞任のみならず、AICC そして BPCC メンバーの資格をも剥奪していることが分かる。⁽⁷¹⁾

ネルーが7月11日付でプラサード宛てに送った書簡はボースたちの抗議集会に対する反対を伝える内容であったが、その中でかねてより強い関心を寄せていた日本軍の侵略下にある中国への訪問にふれている。すでに在ロンドン中国大使からも訪中を勧められており、最終的な蒋介石政府からの反応を待っている状況であったが、この時の情勢を彼なりに次のように分析している。

今直ちに戦争になるとは考えられないようです。しかしそれを確信するのも大変難しいことで、このあとの6週間が非常に重要です。この6週間に何もしなければ中国行きの私の計画を固守するつもりです。

第2次世界大戦は9月1日のドイツ軍によるポーランド侵攻で始まるので、ネルーの予想は約2週間外れたことになり、「ほぼ予定通り」彼は8月21日に中国を訪れた(9月7日帰国)。大戦勃発と同時に総督リンリスゴウはイギリスとともにインドも参戦するという内容の声明を発表し、これによってインドの世論は大きく動かされる。会議派運営委員会(CWC)は9月14日に声明を発表し、イギリスが戦争は民主主義と自由・独立のためとするなら、戦争の目的がインドに如何に適用されるのかを明確にすべきであり、反ファシズムの戦争への参加は自由で民主主義的インドにして初めて可能であるとして、直ちに独立を容認するよう求めた。イギリスがこれを拒否したため、CWCはこれに抗議し、インドはイギリスの戦争には関わらないとの意思表示のため11月22日に全国の会議派州政府に自発的辞任を指令した。会議派がこうして各州の行政から退いたため、イギリスはムスリム連盟への依存を強めるようになり、連盟も公式の声明は出さないが実質的にイギリスの戦争行為を支持した。これによって政治的発言力を強めた連盟は1940年3月のラーホール大会においてムスリム国家(パキスタン)創設を決議するに至る。この段階では連盟会員の中にも疑念・躊躇があったようであるが、7年後の分離独立への確かな一步になったことは疑いない。戦時下にあつて全国的に反英運動は低調な過程を辿っており、会議派からほとんど追放状態にあつたボースもカルカッタを中心に限られた活動を余儀なくされていたが、1940年7月に逮捕される。イギリス支配の象徴である記念碑の破壊運動⁽⁷²⁾に加わったというのが公式の理由とされるが、会議派の役職を失ったとはいえ、ベンガルでは多大な影響力を維持するボースの脅威は植民地当局にとって無視し得ないものであつたろう。このあとボースは、1941年1月に軟禁状態にあつた自宅から「謎」とされる脱出を遂げ、⁽⁷³⁾ ドイツ次いで日本に亡命して彼なりの反英運動を続けるのであるが、それらの詳細については本誌掲載の堀江論文に譲りたい。

こうして見てきたように、1939年に会議派という組織を襲った大きな内部的危機が、それに続く時期、もう一つのより大きな危機に包み込まれる形で、インドは歴史の次の段階へと踏み出していくことになる。

<注>

- (1) 一口に「藩王国 (Rajwada、英語では Princely State)」と言っても、ヴェージャノネス (面積 0.8 km²、人口 206 人) やガーンドール (1.4 km²、229 人) など村のような規模から、ジャンムー・カシミール (22 万 km²、360 万人) やハイダラーバード (21 万 km²、1400 万人) のような巨大なものまでさまざまであった。その総数については、550 前後から 600 台まで統計によってかなりの違いが見られるが、微小なものを「藩王国」として分類するかどうかによって異なるのではないと思われる。ここでは、会議派も密接に関わった全インド藩王国人民会議が発行したパンフレットの数字に従って 584 とした (All-India States' Peoples' Conference [Forward by Jawaharlal Nehru], *What Are the Indian States ?*, Allahabad, 1939, p. 7)。
- (2) Presidential Speech by Rajendra Prasad at the 48th Session of the Congress in Bombay, 26th October 1934 (Valmiki Choudhary ed., *Dr. Rajendra Prasad Correspondence and Select Documents* [以下 RPCSD と略], Vol. 1, Allied Publishers, New Delhi, 1984, p.237).
- (3) Presidential Speech by Jawaharlal Nehru at the 49th Session of the Congress in Lucknow, 12 April 1936 (S. Gopal ed., *The Selected Works of Jawaharlal Nehru* [以下 SWJN と略], Vol. 7, Orient Longman, New Delhi, 1975, pp.180-187).
- (4) Letter from Prasad and Others to Nehru, June 29, 1936 (J. Nehru, *A Bunch of Old Letters*, Oxford University Press, Delhi, 1990 [Reprint; 1st edition in 1958], pp.188-191).
- (5) J.N. Varma, *The Government of India Act, 1935*, Popular Book Depot, Bombay, 1937, pp. 719-754.
- (6) Resolution of the All-India Congress Committee, 17 March 1937 (Maurice Gwyer and A. Appadorai eds., *Speeches and Documents on the Indian Constitution 1921-47*, Vol. I, Oxford University Press, London, 1957, pp.392-393) .
- (7) Letter from G.D. Birla to J.G. Laithwaite, March 17, 1937 (G.D. Birla, *BAPU: A unique association*, Vol. II, Bharatiya Vidya Bhavan, Bombay, 1977, p.334).
- (8) V.P. Menon, *The Transfer of Power in India*, Orient Longman, Calcutta, 1957, pp.56-57.
- (9) Roman Hayes, *Subhas Chandra Bose in Nazi Germany: Politics, Intelligence and Propaganda 1941-43*, Hurst & Company, London, 2011, pp.10-11. ヒトラーの著書の中でインド人を刺激した別の文章は次のようなものである。すなわち、「自分は今でも憶えているが、1920-21 年のころ、突如として民族主義の連中の間から訳の分からない子供じみた希望が起ってきた。英国はインドにおいて崩壊に瀕しているというのだ。当時ヨーロッパをうろつき歩いていたアジアの香具師ども (Asiatic mountebanks) が、普通ならば全く理性的な人々の頭にまで、インドに足場をもっている英国世界帝国は他ならぬインドで崩壊に瀕しているという妄想を植え付けさせたのだった。」または、「自分はゲルマン人として、インドは他国の手にあるよりも英国の統治下にあった方がよいと常々思っていた」というものである。(A. ヒトラー『吾が闘争』[真鍋良一訳]、下巻、興風館、1942 年、448-449 頁)。ボースとヒトラーとの会見は 1942 年 5 月に実現する。
- (10) Letter from Bose to Nehru, 4 October 1935 (J. Nehru, *op. cit.*, pp.123-124); Letter from Bose to Nehru, 4 March 1936 (Nehru, *ibid.*, pp.172-173)

- (11) S. Gopal, *Jawaharlal Nehru: A Biography*, Vol. 1, Oxford University Press, Bombay, 1976, p.199.
- (12) Letter from Bose to Nehru, 13 March 1936 (J. Nehru, *op. cit.*, pp.174-176).
- (13) Letter from Nehru to Bose, 26 March 1936 (S. Gopal ed., *op. cit.*, p.407).
- (14) Cable from Nehru to Bose, 27 March 1936 (*ibid.*, p.408).
- (15) S.C. Bose, “Report of a London Interview”, Bose, *Crossroads: Being the Works of Subhas Chandra Bose 1938-1940*, Asia Publishing House, Bombay, 1962, pp.29-31.
- (16) S・チャンドラ・ボース『闘へる印度』、総合印度研究室、1943年、468-470頁。
- (17) Nirad C. Chaudhuri, *Thy Hand, Great Anarch: India: 1921-1952*, Chatto & Windus, London, 1987, p.504.
- (18) Telegram from Gandhi to Bose, 23 January 1938 (*The Collected Works of Mahatma Gandhi* [CD-Rom edition published by Publications Division, Government of India, 1999. 以下 *CWMG* と略], Vol. 72, p.442).
- (19) Gandhi, “Note to Vallabhghai Patel”, 1 November 1937(*CWMG, ibid.*, p.380).
- (20) Basudev Chatterjee ed., *Towards Freedom: Documents on the Movement for Independence in India*, 1938, Part 1, Oxford University Press, New Delhi, 1999, pp.25-26.
- (21) Leonard A. Gordon, *Brothers Against the Raj: A Biography of Indian Nationalists, Sarat & Subha Chandra Bose*, Rupa, New Delhi, 2012 (paperback, 1st edition in 1990), p.350. 実際、彼の選集で28ページに及ぶ。
- (22) S.C. Bose, “The Haripura Address”, Sisir K. Bose and Sugata Bose eds., *Netaji: Collected Works* [以下 *NCW* と略], Vol. 9 (January 1938-May 1939), Permanent Black, Kolkata, 2004 (paperback, 1st edition in 1995), pp.3-30.
- (23) Gordon, *op. cit.*, p.352.
- (24) N.B. Khare, *My Political Memoirs or Autobiography*, J.R. Joshi, Nagpur, 1959, p.19.
- (25) Chaudhuri, *op. cit.*, p.501.
- (26) Letter from Patel to Prasad, 15 July 1938 (*RPCSD*, Vol. 2, pp.67-68).
- (27) “That Unfortunate Walk-Out”, *Harijan*, 15 October 1938 (*CWMG*, Vol. 74, pp.86-87).
- (28) Letter from Gandhi to Bose, 18 December 1938 (*CWMG*, Vol. 74, pp.325-326). ガンディー選集には入っていないボース宛の書簡で、ガンディーは彼の考えにある連立政権の性格について、「もし荣誉と品位をもつ連立政権を樹立できるなら、われわれは躊躇なくそうするでしょう」と述べている。(Letter from Gandhi to Bose, 22 December 1938, in Chaudhuri, *op. cit.*, p.483)
- (29) A letter from Bose to Gandhi, 21 December 1938 (*NCW, op. cit.*, pp.122-126).
- (30) N.N. Mitra ed., *The Indian Annual Resister* (以下 *IAR* と略), 1930 Vol. I, The Annual Resister Office, Calcutta, 1930, p.363. この部分が1939年6月の改定によって次のように変わる。つまり、10名の代議員が連名で、次期議長として選出したい代議員あるいは議長経験者の名を会議派全国委員会 (AICC) 事務書記長宛てに提出すると、AICC 書記長は (推薦を辞退した以外の) 候補者名を各 PCC に回覧し、定められた日に各代議員はそれぞれの州で適任とする候補者への票を登録する。PCC から各候補者への有効票についての報告を受けた AICC は、投票数の半数以上の最大票を得た候補者を次期議長として発表する。(IAR, 1939, Vol. I, 1939, p.363) これは同年1月の議長選挙の混乱状況に対応する措置であったと思われるが、これ以降もガンディーの発言力に変化が見られることはなかった。
- (31) D.P. Mishra, *Living an Era*, Vol. I (India's March to Freedom), Vikas Publishing House, Delhi, 1975, p.309.
- (32) Letter from Azad to Patel, 28 October 1938 (*RPCSD*, Vol. 2, Enclosure, p.130)
- (33) Letters from Tagore to Bose, 20 November 1938, 14 January 1939, 19 January 1939 (*NCW*, Vol. 9, pp.236, 238, 239).
- (34) Letters from Gandhi to Nehru and Patel, 21 December 1938 (*CWMG*, Vol. 74, pp. 235, 237).
- (35) Bose, “The Tripuri Presidential Election Debate”, Bose, *op. cit.*, (*Crossroads*), pp.87-88.

- (36) “Statement of Vallabhbhai Patel and Others”, 24 January 1939 (*NCW*, Vol. 9, pp.69-70).
- (37) “Second Statement of Subhas Chandra Bose”, 25 January 1939 (*ibid.*, pp.70-73).
- (38) “Statement of Vallabhbhai Patel”, 25 January 1939 (*ibid.*, pp.76-78).
- (39) “Statement of Jawaharlal Nehru”, 26 January 1939 (*ibid.*, pp.79-81).
- (40) “Fourth Statement of Subhas Chandra Bose”, 28 January 1939 (*ibid.*, pp.84-87).
- (41) “Gandhi's Statement to the Press”, 31 January 1939, (*CWMG*, Vol. 74, pp.13-15). 同じころの『ハリジャン』(1月28日付)の論説は会議派の「内部崩壊」を取り上げ、党員と偽っての投票などの不規律を厳しく糾弾しているが、最後の個所の「私には会議派の現状から無政府状態以外の何ものも見えない」という言葉には強い危機感が込められている。(*ibid.*, pp.437-438)
- (42) *Bombay Chronicle*, 2 February 1939 (Mushirul Hasan ed., *Towards Freedom*, 1939, Part 2, Oxford University Press, New Delhi, 2008, pp.1202-1203).
- (43) “Fifth Statement of Subhas Chandra Bose”, 4 February 1939 (*NCW*, Vol. 9, pp.89-90).
- (44) Letter from Gandhi to Bose, 5 February 1939 (*CWMG*, Vol. 75, pp.40-41).
- (45) Letter from Nehru to Gandhi, 9 February 1939 (Uma Iyengar and Lalitha Zackariah eds., *Together They Fought: Gandhi-Nehru Correspondence 1921-1948*, Oxford University Press, New Delhi, 2011, pp.354-355). なおこの編者によれば、この時のガンディーからの書簡(2月8日付)は入手不能であるという。(*ibid.*, p.355の注684)
- (46) *Tribune*, 15 February 1939 (Mushirul Hasan ed., *op. cit.*, pp.1210-1211).
- (47) Resignation Letter of Congress Working Committee Members, 22 February 1939 (*CWMG*, Vol. 75, Appendix III, pp.453-454).
- (48) “Nehru's Statement on the Re-election of Subhas Bose”, 22 February 1939 (S. Gopal ed., *op. cit.*, Vol. 9, 1976, pp.485-487).
- (49) *Tribune*, 24 February 1939 (M. Hasan, ed., *op. cit.*, p.1213).
- (50) *Independent India*, 26 February 1939 (*ibid.*).
- (51) Letter from Linlithgow to Zetland, 29 February 1939 (*ibid.*, p.1230).
- (52) 1936年のラクナウ大会で採択された「大衆との接触 (Mass Contacts)」という党組織拡大の方針と、ガンディーの「都市を村と村人に戻す」というスローガンに基づき、年次大会を従来のような都市ではなく、各地の小さな村で開催することになった。(Pattabhi Sitaramayya, *The History of the Indian National Congress 1935-1947*, Vol. II, New Delhi, 1969 [Reprint, 1st edition in 1947], p.28) こうして1936年はマハーラーシュトラのファイズプル、37年はグジャラートのハリプラー、39年は中央州のトリプリ、40年はビハールのラームガルと、大きな全インド地図にも載らないような小村で大会が開催された。
- (53) 各年次大会の最終日に、議長によって運営委員会の任命が行われ、それまでは前回大会の委員がそのまま委員会に止まるのが通常であった。
- (54) Presidential Address by Subhas Chandra Bose at the 52nd Session of the Indian National Congress in Tripuri, 10 March 1939 (Bose, *op. cit.*, [*Crossroads*], pp.108-111).
- (55) *IAR*, 1939, Vol. I, p.332.
- (56) *ibid.*, pp.335-336.
- (57) *Amrita Bazar Patrika*, 15 March 1939 (Mushirul Hasan ed., *op. cit.*, pp.1257-1258).
- (58) Letter from Bose to Gandhi, 25 March 1939 (*NCW*, Vol. 9, pp.127-130).
- (59) Letter from Gandhi to Bose, 30 March 1939 (*CWMG*, Vol. 75, pp.217-218).
- (60) Letter from Bose to Gandhi, 31 March 1939 (*NCW*, Vol. 9, pp.137-143); Letter from Gandhi to Bose, 2 April

1939 (*CWMG*, Vol. 75, pp.223-226).

(61) Letter from Bose to Amiya Nath Bose, 17 April 1939 (Bose, *op. cit.*, [*Crossroads*], pp.112-114).

(62) Letter from Nehru to Prasad, 17 April 1939 (*SWJN*, Vol. 9, p.556).

(63) Letter from Nehru to Gandhi, 17 April 1939 (J. Nehru, *op. cit.*, pp.379-381).

(64) Letter from Nehru to Azad, 17 April 1939 (*ibid.*, pp.381-382).

(65) Bose, “Statement on Resignation from Congress Presidentship”, at the meeting of the All-India Congress Committee held in Calcutta on 29 April 1939 (*NCW*, Vol. 9, pp.107-109).

(66) *ibid.*, p.109.

(67) *IAR*, 1939, Vol. I, pp.356-358.

(68) *Amrita Bazar Patrika*, 12 July 1939 (Mushirul Hasan ed., *op. cit.*, pp.1332-1333).

(69) *Hitawada*, 14 July 1939 (*ibid.*, pp.1344-1346).

(70) “Congress Working Committee Resolution”, August 11, 1939 (*CWMG*, Vol. 76, pp.226-227).

ガンディーは8月23日の新聞声明で、同決議の草案は自分が書いたと語っている。同じ声明の中で彼は、予想される戦争に関する非暴力を軸とする自分の考えが、会議派の同僚たちのそれと異なることなどにふれて、会議派との公式な関係の撤回を示唆している。(*Harijan*, 26 August 1939, in *CWMG*, Vol. 76, pp.258-260).

(71) Telegrams from Bose to Prasad, 11 August; from Prasad to Bose, 11 August; from Bose to Prasad, 14 August; from Prasad to Bose, 14 August; From Bose to Prasad, 16 August; from Bose to Prasad, 16 August; from Prasad to Bose, 16 August; from Bose to Prasad, 19 August 1939 (*RPCSD*, Vol. 4, pp.25, 30, 30-31, 31-32, 40, 42, 48).

(72) この「象徴」とは現在で言う旧ウィリアム砦で、1756年にベンガルのナワーブによって小さな部屋に閉じ込められた100人以上のヨーロッパ人が窒息死したとされる。生き残った23人の一人が当時のウィリアム砦の司令官 J.Z. ホーウェルで、のち1902年にインド総督カーズンが建物—今でも「カルカッタのブラック・ホール」として知られる—の前の大通りに記念碑を建てて「ホーウェル・モニュメント」と名付けた。しかしベンガル人にはこの話は全くの「神話」として受け取られており、このイギリス支配の象徴を破壊しようという動きが続いていた。なお、これに関する興味深い次のような研究書が最近に出版された。Partha Chatterjee, *The Black Hole of Empire: History of a Global Practice of Power*, Princeton University Press, Princeton and Oxford, 2011, 425 pp.

(73) この脱出行とその後のボースの動きについては、ただ1人ボースの案内人として同行したパクトゥン人バガット・タルワール自身による次の書物を紹介しておこう。Bhagat Ram Talwar, *The Talwars of Pathan Land and Subhas Chandra's Great Escape*, People's Publishing House, New Delhi, 1976, 267pp.